

逢魔が時

梅津 郁子

影絵のように
暮れていく町の
片すみで

イチヌケタ
震える声を合図に
子ども達が
散り散りになると

いつまでも
遊びつづける
子ども達に向かい

大きな袋をかついだ

おじさんが

ほら

夜を連れ

やってくる

袋のおじさんがくるよ
袋のおじさんがくるよ

そう

囁くものがある

夏の日差しを
いっぱい浴びていた

茂みは

いつしか

人食いの森になり

線だけになった

電信柱が

たかくたかく伸び始める

砂場に捨てられた

頭のない人形が起き上がり

じゃれあう

ちいさな輪の真ん中を

狙っている

袋のおじさんがくるよ

袋のおじさんがくるよ